



男性研究者が育休を取る理由



静岡大学教育学部准教授

郷式 徹 (ごうしき とおる)

2000年、京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。同年より静岡大学教育学部講師。2002年より准教授。2007年12月～2008年7月、育児休業。現在(2011年度)は英国(ランカスター)にて在外研究中。専門は認知発達心理学。主な著書は『幼児期の自己理解の発達』(ナカニシヤ出版)など。

育休取得の理由？

2007年7月に次男が生まれ、その年の12月から次男が1歳になる翌年7月まで育児休業を取りました。それ以来、時折、育休を取った理由を尋ねられます。「育児のつらさや喜びを体験したいと思って」とか「専門が発達心理学なので育児を経験しようと思って」と答えると納得されますが、「それほどデメリットがないように思えたから」と答えると多くの人に納得いかない顔をされます。男性が育休を取らない理由として一般に、職場の理解の問題、収入の減少、研究者の場合には研究の中断といった「デメリット」が挙げられることが多いので、奇妙に思われるようです。

私の場合、妻より私が育休を取ったほうが妻の仕事が継続でき、私の研究も減収も何とかなるだろうとの甘い見込みで決断しました。

妻の仕事(非常勤職)

妻の仕事は非常勤で、育児休業の制度を使えません。また、非常勤の場合、育児に専念することは、仕事を一度全て断ることになります。復帰後に再度仕事の依頼があるかはわかりません。さらに、非常勤の場合、保育所入所の申請時に仕事をしていないと入所が難しいことが多いです(入所できないと働けないのですが……)。そのため、妻が長く休むのは(妻の仕事上)大きなデメリットでした。

収入の減少

男性が育休を取らない理由に減

収が挙げられることがあります。もちろん、私も収入は減りました。育休中は給料が出ませんから。しかし、経済的なデメリットは驚くほどのものではありませんでした。

常勤職の場合、育休中の健康保険料などは免除されますし、月給(ボーナス含まず)の50%分は育児休業給付金が支給されます。また、私の場合、育休を取った次年度に子どもを保育園に入れたので、その年の保育料がかなり安くなりました(保育料は前年度の世帯年収を基準に決まるので)。こうしたことを合わせると減収の5、6割はカバーできたように思います。

研究の中断

育休中は大学の授業や会議がないので、論文を読んだり、書いたりする時間が取れるのではないかという幻想をいっていました。全くの間違いでした。机に何時間も向かうような作業はほとんどできませんでした。専門書や論文を読もうとしても、いきなり赤ん坊が目覚まして泣き出し、ミルクを飲ませたり、おむつを替え終わった時にはどこまで読んだかさえ忘れていました。

しかし、育児以外何もできないわけではなく、コマ切れの時間は結構ありました。男性の場合、出産や授乳による肉体的負担はないので、内容を忘れても構わない本を読むといった、結果を求めない作業であれば可能です。私は英語が苦手だったので(今でもですが)、育休に入ってから、小学校

低学年向けの簡単な英語の本から読み始め、育休が終わるまでに200万語くらい読みました。簡単なものから始めたのは、赤ん坊を抱っこしたままだと辞書を引けないのですが、私のその時の実力では辞書なしで読めるのがそのレベルだったからです。育休終了時には中学生向けくらいの小説なら何とか読めるようになりました。育休を取ったことによる研究へのメリットは(英語の)論文を読むスピードが上がったことぐらいで、育休経験が専門の発達心理学に生かされたという実感は特にありません。ただ、私は発達相談をする機会があるのですが、そうした時にお母さんに「半年ほど育休を取りまして……」という話をすると、ぐっと距離が縮まり、具体的な困りごとなどを話してくれるようになることが何度かありました。

もっと計画的に過ごせば、研究にも、さらにメリットを生み出せたかもしれません。しかし、それほど大変でもなかった気がするのは、(結局は)家事の多くを妻が担ってくれたことと子どもがよく飲み、よく眠るやりやすい子だったことによります。育児の状況や困難は人によって違いますが、特に典型的でない困難な状況(多くの場合、困難な状況は典型的ではありません)に対する支援やサービスはほとんどないのが現実です。育児が大変かどうかはやってみないとわからないので、育休を「計画的」に過ごそうと考えること自体に無理があるのかもしれません。